

「ベルナール・フランク教授のお札コレクション

—

インターネットによる日仏研究協力の事例」

フランス国立東洋言語文化研究所 (INALCO)
日本語文化学部助教授
ビュテル ジャン＝ミシェル

まず、國學院大學 21 世紀 COE プログラムの関係者の皆様に対して、特に、井上順孝先生と平藤喜久子先生に、

今回のシンポジウムに御招待頂きましたことに、心よりお礼を申し上げます。お二方には、昨年、フランスへの研究旅行の際に初めてお目にかかり、両先生が、ヨーロッパで行われている研究に関して非常に熱心な情報収集をされていることに、大変感銘を受けました。その時にお目にかかれたことがきっかけとなって今回このように日本に来ることができたのをとても嬉しく思います。皆様の進めておられる、研究ネットワークの確立のプロジェクトは必ず大変な成功をおさめることと思います。また、フランスの若手の研究者たちもこのプロジェクトに大きな関心を寄せており、是非参加の機会があることを願っています。

実は、私は今回 3 年ぶりに初めて日本に再び来ることができて、とても感動しているのですが、日本語力の方は完全に錆びついてしまっているので、どうか、御容赦ください。

さて、本日の私の発表においては、故・ベルナール・フランク教授の収集した

お札コレクションについて現在行われている日仏共同研究プロジェクトを通じて、シンポジウムの主題に関する考察を試みたいと思います。といいますのも、このフランク・コレクションをテーマに、IT 技術を駆使して、現在フランスの日本研究でもっとも野心的なプロジェクトの一つが行われているところなのです。

こちらが、発表のアジェンダとなります。

1. フランク教授のお札収蔵コレクションの紹介
2. コレクション収集の背後にあったフランク教授の意図は何であったか。
またその意義についての検討。
3. 本コレクションが意義を持つために必要と考えられる2つの条件。
4. 「3」で仮定した条件を成立させる上でのインターネットの有用性。
5. 本共同研究プロジェクトにおいて作成中のデータベースの紹介。研究界および一般社会のそれぞれに対して持ちうる有用性の検討。

まず最初に、フランク教授のお札収蔵コレクションを簡単にご紹介します。コレクションの経緯、フランク教授の亡くなった後に開始された現行のプロジェクトの概要、そして現在作成中のお札のオンラインデータベースについてご説明したいと思います。

次に、フランク教授自身がこのコレクションにこめた意図は何であったのかを探ります。さらに、その意図に対して、あえてその意義が何であったかという問いに注目します。

さらに踏み込んで、本コレクションが意義を持つために必要と考えられる条件は何であるかを検討することとします。

また、そこで仮定した条件を成立させる上で、どのような形でインターネットが役立つかをご説明致します。

最後に、本コレクションの内容を整理し、より活用できるようにする目的で現在作成中のお札のオンラインデータベースについてより詳細に入ってご紹介し、研究界および一般社会のそれぞれに対してどのような有用性を持ちうるかの考察を試みたいと思います。

ベルナール・フランク教授のお札コレクションは、欧州の三大お札コレクションの一つに数えられている。フランクのものより先に作成された他の2つは、B. H. チェンバレンとアンドレ・ルロワ・グルアンによるものである。フランクはコレクションの収集を1954年に始め、亡くなるまでの約40年間にわたって続けた。収蔵点数は1000を超えており、フランクの死後、パリのコレージュ・ド・フランスに遺贈された。

チェンバレンおよびアンドレ・ルロワ・グルアンのコレクションと異なり、フランク・コレクションは博物館等の依頼によって作成されたのではなく、あくまで作成者の個人としての関心によるものである。それでいて、フランクのそれは3つの中でも最も体系的・論理的な構成を持つものと言ってよい。同時にフランク自身の個人的体験と研究者としての知的関心の両方をバックボーンと

し、さらにフランスの百科全書派の伝統にも根ざしているという特徴を持つ。それはエミール・ギメによりギメ博物館ですでに体现されていたものの系統に連なるものと言えよう。フランク・コレクションの最終的な構想は、日本人の表象の世界に存在する無数の神々をお札の図画を通じて示し、日本全国の何万という神社仏閣に祀られている神々の全体像を — フランクはそれを「パンテオン」と呼んでいる — 表そうというものであった。

上記の構想に対する多大な敬意を否定することなく、本発表においてはより現代的な観点からそれに対していくつかの疑念をあえて呈することを試みる。日本の通津浦裏で祭られている神々は、祀る者や参拝者のそれぞれに対して異なる顔と特徴を持ち、また一般的に人々は神々をその名前よりもその鎮座する場によって識別していることが知られている。果たして、日本の神々の「パンテオン」なるものを描くことからしてそもそも可能なことであろうか？「パンテオン」という言葉は、その内部においてそれぞれの神が固有の立場と役割を持ち、それらが互いに関わり合って構成するある種の秩序と構造によって成り立つ世界を表すものであるが、これは日本の神々の世界にも応用が可能な概念なのだろうか？フランク・コレクションの2次元の世界でも、フランク自身がカタログを作成したギメ美術館の神仏像コレクションの3次元の世界においても、日本の神々の全体像を図画像によって再現することの難しさは明らかである。同カタログにおいて神道の神々の現れる回数が大変に少ないこと自体がその現れと言えよう。

ではなぜフランク・コレクションにより開始された作業を我々が継続しようとしているのであろうか？偉大な先達への敬意を表すためのみだろうか？彼の

作業の続きに自らを投入することで、フランクから何かを学ぼうとしているのだろうか？もしくは、固有の成果物を完成に近づけることの純粋な喜びによるものであろうか？

一方で、日本の研究機関として史料編纂所と国学院大学が本共同プロジェクトに参加していることは、フランク・コレクションの意義はフランスにおける日本研究の関心にとどまらぬものであることを伺わせる。私見では、本プロジェクトが意義あるものとなるためには2つの条件を満たす必要がある。まず、コレクションにおけるお札の記述の精度が最も高い水準のものであること。二番目には出来る限り収集内容を網羅的なものに近づけること。以上の条件が満たされれば、本コレクションは2つの有用性を備えることになるだろう。非常に限られた数ではあるが、一定の研究者に対して正確性のある参照ソースとなり、より一般的には、平均的な資料よりもより掘り下げた知識を提供する情報源となりうる。本発表においてはIT技術とツールがいかなる形で以上の条件および有用性の実現を助けているかを考察する。

発表の終わりの部分では、上記の条件と有用性の観点から、すでに作成されているデータベースの一部を紹介する。現段階では未完成であるが、本シンポジウムを通じての東西の研究者間の交流により関係者の考えが成熟し、プロジェクトのさらなる進捗に資することを期待したい。